

ふまゝと熊野

筆道資料の探訪

熊野筆誕生の記

「天保二年頃安芸郡熊野村畑のよナル者筑前博多ニ出稼同所毛筆製造者久作ナルモノト夫婦トナリ帰郷ノ上本業ヲ創始セシカ兩人死没後再興者ナク中絶ノ姿ナリシモ天保四、五年頃同村孫出（孫居田）才兵衛ナルモノ広島ヨリ吉田清蔵ヲ伴ヒ帰り本業ヲ起シ亞テ若島常太郎、胤森仁三郎ナルモノ奈良ニ於テ伝習ヲ受ケ帰り本業ヲ営メルニ至リ爾來漸次普及発展シ分業ヲ行ヒ男女ノ別ナク或ハ本業トシテ副業トシテ之カ製造ニ従事スルニ至レリ
目下其ノ従業戸数千三百従

業人員三千余ヲ算シ其ノ製品ハ内地ハ勿論遠ク満朝地方及ヒ台湾其ノ他支那内地ニ及ヒ益々販路拡張シ従ツテ製造高モ年々増加シツ、アリ」

この記録は、広島県内務部が大正八年に調査した「広島県副業状態調査書」の中に記載されています。（資料提供、広島大学大学院生久保井宏和氏）

また一説には「筆の町熊野誌」で、大正六年八月十五日付の広島朝日新聞の説を紹介して、「天保年間に天涯無宿の一人が本村を訪れて毛筆製造を始め、数年後村民はこれを習ってきた

が十数名は摂津の国有馬に赴き技術を習得して帰り、製造販売に従事したがいかに任せなかつた」とあります。

同誌も指摘するように具体的事実が明瞭でなく、その説の根拠も明らかではありません。

このように熊野村において初めて製筆を始めた人物については一人を特定することは困難です。

現在熊野町には毛筆の元祖の徳をほめる石碑が二基建てられており、そこに刻まれている人名は佐々木為次、井上治平、音丸常太の三人にのほります。

大正四年安芸郡役所の刊行した「安芸郡風教誌」では、実業功労者として熊野毛筆元祖を乙丸常太郎、井上弥助としています。



貫名海屋在銘九谷徳利と古端溪石子（馬蹄硯）